

# キノコの幸せ

五華内しびよ



「もう、どれだけ経（た）つだろう」

「君がここに来てから5時間は過ぎたな」

「おばあさんは？」

「寝ているよ、夜中だもの」

「まだ、生きているってことだよね？」

「すやすやと気持ちよさそうだな」

それを聞いてベニテングタケは、力なく座（すわ）りこみました。

そして、おばあさんの胃袋（いぶくろ）に、改（あらた）めて尋（たず）ねたのです

。

「お腹は、まだ痛（いた）くないの？」

「ぜんぜん」

ベニテングタケは、キノコの仲間。そして、食べると怖（こわ）い毒（どく）キノコ.....のはず。

夏の初めに、里山（さとやま）の雑木林（ぞうきばやし）で生まれ、秋の初めの今日、この家のおじいさんが摘（つ）み取って帰りました。

だいじょうぶでしょうか。夕食に出されて、今は、おばあさんのお腹の中。

ベニテングタケにとって、里山の雑木林は、とてもつらい場所でした。

見上げる空には、クヌギやコナラの木たちがいて、頭の上からいつも意地悪（いじわる）を言われたからです。

「おい、おまえ。キノコのかげにどうして真っ赤（まっか）な色をしてるんだ？」

「まずそうな色をして。毒も有りそうだ」

生まれてしばらくは、鮮（あざ）やかな赤色だったから、高い上からも、はっきり見分けがついたのです。

また、あるときは――

「お前を食べるとどうなるんだい。腹をこわすとか、息ができなくなるとか。それともコロリと死んでしまうのかい？」

アリの行列が、頭の傘（かさ）を渡りながら尋（たず）ねてきます。

「ぼくは知らないよ。自分を食べたことがないんだから」

ベニテングタケは、少し怒（おこ）ったふうにそう答えました。

すると――

「みんな、気を付けろ。ああ怖い怖い」

アリたちは、逃げるそぶりだからかいながら、巣（す）へともどって行きました。

だからベニテングタケは、こんな雑木林（ぞうきばやし）をいつか抜（ぬ）け出したいと願いました。

けれど、手も足も無いのだから、しかたがありません。

たまに人間が、キノコ狩（が）りにやって来ても、真っ赤（まっか）なキノコは、見向きもされませんでした。

ところが今日、ベニテングタケは、とうとうこの雑木林を後（あと）にします。

昼間、おじいさんがやって来て、しゃがみこむなり、目と目が合いました。

節（ふし）くれの太い指がのびてきて、根元のほうをつままれて、すると、すぽっと地面を離（はな）れて行くではありませんか。

「やった！ やった！」

ここにいてしばらく経（た）つうち、だんだん体は赤茶色に変わって、美味（おい）しそうにも見えたのでしよう。

「僕は、だましていない。勝手に茶色になったんだから。僕を食べて.....何が起きても知らないよ。食べる方が悪いんだ」

そんな、身勝手を言ったベニテングタケ。実（じつ）はお腹の中で、暗い気持ちになりながらハラハラもしています。

「何も知らずに、僕を食べたおばあさん。今から苦しみだしたらどうしよう」

心配な思いが心の底から湧（わ）いて、なんだか、申（もう）しわけない気もしてきます。

雑木林（ぞうきばやし）を抜（ぬ）け出した、うれしい気持ちは、もう心のどこにもありません。

そして、何も出来ずにただこうしていることが、あそこにいるのと変わりなく、嫌（いや）に思えてきたのです。

その時でした。まだ夜中のはず――

おばあさんが起き出して、おかげで突然ゴロンゴロン。胃袋（いぶくろ）があっちへこっちへ動き出したのです。

ベニテングタケは、毒（どく）がまわったせいだと慌（あわ）てています。

「おばあさん、具合（ぐあい）でも悪いのかい？」

横でいびきをかいていたおじいさんが、ハッと目を覚（さ）まして聞きました。

おばあさんは体が弱く、十日も前から寝たきりなのです。

「いえいえ違うの。夕食でいただいた、キノコがとても美味（おい）しかったから、元気が湧（わ）いて目が覚（さ）めたのよ」

「そんなに美味しかったのかい」

「美味しかったわ。本当に美味しかった。キノコは、タマゴタケって言ったわね」

「毒（どく）のあるベニテングタケにもよく似（に）ているけれど、あれはタマゴタケと言う名の、とても美味しいキノコだよ」

「それじゃあもっと元気が出るように、必ずまた食べさせてくださいね」



二人の話を聞いて、タマゴタケと胃袋（いぶくろ）は、とても驚きました。  
しかし、それよりも、おばあさんに元気がもどって「本当に良かった」と喜（よろこ）び合いました。

タマゴタケは、自分の心がほんわか温（あたた）まるのを感じます。  
そして、やっと幸せになれたと心から思いました。

「おじいさん。あの雑木林（ぞうきばやし）から、連れ出してくれてありがとう。おばあさん。美味（おい）しい美味（おい）しいって、何度もほめてくれてありがとう」

最後にそう言うと、タマゴタケは、暗いお腹の底へと消えて行きました。

（おわり）

## キノコの幸せ

<http://p.booklog.jp/book/124240>

著者：しびよ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/sibiyo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/124240>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト